

インド、ブータン国境の聖地巡礼 ーアルナーチャル・プラデーシュとメラの事例からー

脇田道子

日本ブータン研究所

はじめに

インドのアルナーチャル・プラデーシュ州西端に位置するタワン県、西カメン県とブータン東部のタシガン県の山岳地帯には、地元の人びとが聖地として崇める場所が数多く残されている。この国境地帯は、かつてはチベットの中心部からモン〈mon〉あるいはモンユル〈mon yul〉^{注1)}と呼ばれ、周縁の辺境の地と見なされてきた。本稿で取り上げる聖地は、モンユルの文化遺産として、また仏

教のヒマラヤ南麓への伝来の黎明期を偲ばせる重要な場所でもある。

筆者は、1999年以來これらの聖地を巡ってきたが、インド、ブータンそれぞれの地政学的な状況や近代化などの影響で、聖地と人びととの関係にも明らかな変化の兆しが見える。本稿では、地元に残る伝承などを紹介するとともに、その現状を報告する^{注2)}。



図1 タワン県、西カメン県および周辺地域概念図（脇田 2016） 制作協力：高橋洋氏

1. チベット歌舞劇ダーキニー・ドワ・サンモの舞台

チベットの古い民話で有名な歌舞劇にもなっているダーキニー・ドワ・サンモの物語の舞台はモンユルだとされ^{注3)}、アルナーチャル・プラデーシュのタウン県、西カメン県の主要な民族集団であるモンパ (Monpa)^{注4)} やブータンのサクテン (Sakteng)、メラ (Merak)^{注5)} の人びともそう信じている。彼らの間では、「カンド・ドワ・サンモ^{注6)}」の伝説として知られている。以下がそのあらすじである^{注7)}。

モンユルのマンデルガン (maNDal sgang) にカラワンプ (ka la dbang po) という王がいた。動物を殺生する狩猟を好んだが、ある時、狩りの途中で愛犬を見失った。その愛犬を探すうちに美しい娘ドワ・サンモを見初め、妃とした。彼女は、仏法を知らない野蛮な人びとのために天から遣わされた女神ターラーの化身だった。やがて王との間に王女クントゥ・サンモ (kun tu bzang mo) と王子クントゥ・レクパ (kun tu legs pa) が生まれ幸せな暮らしをしていた。それを嫉妬したのが、王のもう一人の王妃で魔女でもあるハシャン (ha shang) だった。彼女の魔手から逃れるためドワ・サンモは天に飛び去り、王は牢につながれた。王女と王子はハシャンが放った刺客になんども殺されそうになりながらも、王子がペマチェン国 (yul pad ma can) の王になり、最後には、ハシャンを滅ぼし、父王を救い出し、国中が平和と幸福を享受した。

地元の人びとの間では、マンデルガンはタウンのことで、カラワンプ王の宮殿は現在タウン僧院が建っている場所にあったと信じられている。西カメン県のドムコにはドワ・サンモの生家があったとされる場所が聖地となっている。実際には、カラワンプ王の愛犬の足跡が残された岩があるだけであるが、近くのラギヤル・ゴンパ (lha rgyal dgon pa) というゲルク派の僧院にはドワ・サンモが籠って瞑想した部屋や像が残されている (写真1)。

また、タウン県のモクトウ (Mukto) にはクント・レクパが刺客によって突き落とされた断崖に比定

される場所があり、同県のゼミタン (Zemithang) には、魔女ハシャンが住んでいた建物だと噂される家がある。タウン僧院のある場所からはかなり距離があるので、ハシャンの家とするのは話の筋から無理があるが、建物に多くの窓があることが常にドワ・サンモとその子供たちの動向を監視していたことを連想させたのであろう。また、ゼミタンには女性が母親を通して代々毒を継承し、憎む相手にそれを盛るという言い伝えがある。最近では聞かれなくなったが、2000年代初頭に筆者がゼミタンを訪ねた時、西カメン県ディラン (Dirang) から同行したモンパ女性は、ゼミタンで料理された食事には毒が入っていると言って手をつけなかった。1995年にゼミタンで調査したインドの人類学者は、ゼミタンの8つの村で8人のモンパ女性が黒呪術を操る力を持っていたと報告している¹⁾。こうしたことも、魔女の館がゼミタンにあるという伝承を創り出す根拠になったのではないかと推察している。

危ういところをドワ・サンモに助けられ、やがて王子はペマチェンという国の王となる。このペマチェンは、ブータンでは、タシガン県のチャリン (Chaling) にあるペマチェン村とされている。その住民の多タウンから移住してきたダクパと呼ばれる人たちである。地元の人びとの話によれば、村の家々は最近建てられたもので、ペマチェンの遺跡の壁に使われていた石が再利用されているという^{注8)}。

そして、最後に王子が魔女を弓矢で射殺し、その遺体を埋めたのが、チャリンからメラに行く途中に現在も残る黒い仏塔チョテン・ナクポ (mchod rten nag po) である (写真2)。

この話は、狩猟を好み罪のない動物を殺生する王と魔力を使って主人公たちを追い回す魔女ハシャンがドワ・サンモを通して仏教によりそれぞれ教化、調伏されるストーリーとなっている。その話がチベット人の間では有名な歌舞劇となっているが、残念なことに仏教徒であるモンパの若者世代にはこの話は伝わっていない。その一番の原因は、モンパの人びとが書き言葉を持たないこと、大半はチベット語の読み書きができず、学校で習うのがヒンディー語と英語であることである。年配の人たちは、両親や祖父母から伝え聞いてあらすじは知っているが、大学などでチベット語を学



写真1 ラギャル・ゴンパのドワ・サンモの像



写真5 盗掘されたサクテンの仏塔



写真2 黒い仏塔チョテン・ナクボ（手前）



写真6 ツォルン・ゴンパの廃墟（4065m）



写真3 壁画に描かれたアマ・ジョモ



写真7 縮小したダンリン・ツォ



写真4 アマ・ジョモ・クカル頂上と直下の湖



写真8 新築されたダライ・ラマ6世の堂（タウン、ベルカル村）

んだ人たちが以外の若い世代には伝わっていない。モンパの学校では、仏教文化を継承する目的で2011年から1年生から8年生までチベット語教育が始まっているが、教師不足、教材不足のため、まだ軌道にのっていない。「カラワンボ王」というタイトルでドワ・サンモの話が取り入れられているのは7年生の教科書であるが、そこへたどりつくまでチベット語教育が浸透している学校はごく少数である。

ブータンでは、正確な年は不明だが2005年頃までは、学校のゾンカ語教科書にこの話が掲載されていたというが、現在は教えられていない。そして話を知っている人びとの多くも、ペマチェンや黒い仏塔がタシガン県に存在することを知らないというのが現状である。

2. 女神アマ・ジョモの住処―急激な近代化の中で

ブータン東部のタシガン県の山岳地帯にあるサクテンとメラは、1974年にブータンが外国人観光客を受け入れるようになって長い間、入域が禁じられてきた。インドとの国境地帯に位置し、現在でも双方の住民は身分証明書ひとつで自由に往来を続けている。自動車道路はないので、徒歩による山越えである。2008年から2013年の政府の第10次5か年計画で、東ブータンの観光開発に力が入られることになったときにその観光の目玉となったのが、サクテン、メラで、2010年9月1日に正式に外国人観光客に開放された^{注9)}。サクテンは標高約3000メートル、メラは3500メートルの高地に位置し、人びとは季節により牧草地を移動する移牧を行っている。牧畜民という生業、一般のブータン人とは異なる独特の民族衣装^{注10)}、自然の豊かさ、シャクナゲや青いケシなどの植物が豊富であることなどがブータンを何度も訪れた人びとを惹きつける要素となっている。

筆者は、2006年、2007年、2008年、2012年、2015年、そして2016年の6回メラを訪問した。2008年までは、政府のゲストという立場であったが、自動車道路はもちろん、電気も携帯電話のネットワークもなかった。だが、2010年以降、大きな変化が起きている。2011年には携帯電話が通じるようになり、電気も引かれた。それだけでなく、2015年には未舗装ではあるが、メラま

で至る自動車道路ができたのである。2007年8月にメラで当時のタシガン県知事が小学校を訪問している場に居合わせたことがあった。県知事が前年12月に即位したばかりの第5代国王の肖像写真を生徒たちに見せ、それが誰かを尋ねたが生徒たちは答えられなかった。まだテレビはなく、正式な戴冠式は2008年11月だったので、国王の顔を知らなくても無理はない。だが、国王夫妻が2015年5月にメラとサクテンを訪問し、子どもたちは国王に直接会う機会ができた。歴代の国王の中でメラとサクテンを訪問したのは第5代国王が初めてであった。それまでも第4代国王の王妃たちが相次いで訪問したことはあったが国王自身の訪問はなく、人びとが待ち焦がれていた訪問であった。

この訪問中に、国王がメラの人びとに約束したのは、アマ・ジョモ〈a ma jo mo〉の像を作って贈ることであった。アマ・ジョモとは、サクテン、メラの人びとが王政下にあった自分たちをチベット南部のツォナ〈mtsho sna〉から現在の地へ導いた救い主、そして守護神として畏怖の念をもって崇めている女神のことである^{注11)}。サクテンやメラの人びとは、護法尊ベルデン・ラモ〈dpal ldan lha mo〉の別の姿であるジョモ・レマティ〈jo mo re ma ti〉とアマ・ジョモとを同一視している。伝説の中では幼子を背負った少女として語られるが、寺院の中の壁画や像としては、多くの場合、忿怒尊の形をとっている（写真3）。

メラの村から眺められるアマ・ジョモの宮殿があるとされる標高4383mのジョモ・クカル〈jo mo sku mkhar〉は聖山とされ参詣はジョモ・コルラ〈jo mo skor ra〉と呼ばれ、ブータン暦7月と8月の1日から20日の間に行われる。7月15日には、山頂で奉獻祭を行うため、その日を目指してアマ・ジョモゆかりの聖地を巡拝しながら登山するのが一般的である。施主となる複数の家族がグループを組んで2泊3日で参詣するが、ジョモ・コルラには「死」、「血」、「食物」、「煙」に関わる厳しい禁忌がある。

死者が出た家は、3年間参詣に参加できず、その家からは参詣に必要なチーズやバターなどの供物の提供を受けてはならず、馬を借りることもできない。もし、村内に死者が出た場合と出産があった場合、3日間は誰もこの山に入山することがで

きない。つまり、出発予定日の3日前から出発日までに死者が出た場合に入山は中止となる。「死」に関する忌みはメラの普段の生活にも存在する。たとえば、サクテンでは遺体を108つに切り刻んで川に流す慣習があり、現在はその処理場の近くに火葬施設が設置され、火葬も行われている。しかし、アマ・ジョモの宮殿のお膝元のメラの場合には、そのいずれも厳しく禁じられているため、麓のランジュンまで遺体を運び火葬することが習慣となっている。

また、月経中の女性は参詣には参加できず、そうでない女性も、頂上直下の湖ラ・ツォ〈blamtsho〉までしか行けない（写真4）。つまり、頂上は女人禁制となっている。参加予定の村人は、前日から下山まで豚肉、鶏肉、鶏卵、ニンニク、タマネギは食してはならず、持ち込みも禁じられている。タバコも厳禁である。過去に、あるインド人女性ジャーナリストが頂上に登ることを主張したことがあった。村人が拒否したので登頂はあきらめたが、彼女が登山中に喫煙したため悪天に見舞われその年のコルラは散々だったという話が語り種になっている。

先述のように2010年以降のインフラ整備により人びとの暮らしが、大きく改善されたことは事実だが、一方で急激な変化による弊害も起きている。たとえば、仏塔を破壊し、内部に納められた宝石や仏具を盗掘する犯罪が急激に増えたことである。サクテンやメラのあちこちで破壊された仏塔を目にするようになった（写真5）。これは、ブータン全体でも同様だが、特にタシガン県が国内最多で、2008年から2012年にかけて761件起きた仏塔破壊の内、タシガン県が最多の236件、次がモンガル県の114件であるという^{注12)}。ブータンの新聞報道によれば、その犯人はブータン人で、盗品を売ってトラックを購入するつもりだったという供述もある^{注13)}。サクテンやメラの場合も、家畜を売ったわけでもないのに突然大金を手にし、テレビや車を購入した人びとに疑いの目が向けられている。

先に触れた魔女ハシャンを埋葬した黒い仏塔も2010年から2012年の間に3回盗掘の被害に遭っている。メラの人びとは「信仰心のかけらもない盗人には、必ずや魔女の祟りがある」と憤るが、それ以上に村に災いが及ぶことを恐れていた。仏

塔破壊という行為は、人びとの信仰心に対する冒とくであるだけでなく、共同体内部に不信感と猜疑心を醸成する原因ともなっている。それこそが、人びとが恐れる最大の「災い」のひとつであろう。

道路が建設されてメラの人びとには新たな心配事が増えた。メラには遺体を麓の村に運ぶときには、途中のゲンゴー（Gengo）村にあるゲンゴー・ラカンの手前から寺の下手の道を通らなければならないという決め事がある。その理由は、ゲンゴー・ラカンは、アマ・ジョモがチベットから運んだ経典が納められているなど、神聖な寺院だからである。だが、新たに建設された自動車道路は寺の上手を通っている。2016年5月現在、人びとはこの決まりを守って遺体を担いで寺の下を通り、村はずれまで運んでから車に乗せているが、それがいつまで守られるかと信仰深い人びとは危機の念を抱いているのである。

3. ツォルン・ゴンパー寺院の廃墟と国境に点在する神秘的湖

メラから北東に2日間歩いたインドとの国境近くにツォルン・ゴンパ〈mtsho lung dgon pa〉と呼ばれる寺院の廃墟がある（写真6）。標高4065メートルの高地に位置している。地元の人びとのなかでも近くに放牧地がある人を除いては、訪ねる人は決して多くない。だが、サクテンやメラの人びとにとっては大事な聖地となっている。それは、人びとが信奉するチベット仏教のゲルク派をこの地に広めた高僧ロサン・テンペイ・ドゥンメ〈blo bzang bstan pa'i sgron me〉（1475 - 1542）が建てた寺院だからである。

彼は、アルナーチャル・プラデーシュ、タワンのベルカル（Berkhar）で生まれた²⁾。チベットのセラ寺で学びダライ・ラマ2世ゲドゥン・ギャムツォ〈dge 'dun rgya mtsho〉（1475/6 - 1542）の弟子となり、その命を受けてモンユルに多くのゲルク派寺院を建てたとされる。西カメン県カラクタン・サークルのタクルン僧院（Taklung Gompa）やサクテンのユジュック・ラカン〈yul mjug lha khang〉がよく知られている。メラの識者の一人ラム・リンチェンによるツォルン・ゴンパにまつわる伝説の概略は以下のようなものである。

ラマ・ロサン・テンペイ・ドゥンメがタクル

ン・ゴンパにいた頃、メラ側の山中にある湖のすべてに悪霊が住み、麓の人びとを苦しめている夢を見た。彼がそれを調伏するためにそこへ行くことを決心した時、タクルン・ゴンパ周辺の信者たちは危険だからと止めた。するとラマは自ら自分の像を作り、その像に向かって「この人びとを守るのだぞ」と命じると像がこくりとうなずいた。湖を巡ってすべての悪霊を調伏し、近くに寺を建てて瞑想した。その寺がツォルン・ゴンパである。寺にはラマと一人の調理人、馬一頭、犬一匹住んでいた。ある日、調理人が近くの小川へ水汲みに行くと3人の美しい娘がいた。ラマに報告するとラマは娘たちを連れて来るように言った。調理人が迎えに行くと娘たちの姿はなく、代わりに三本の大根が置かれていた。大根を調理しようと切ると血が出てきたが、そのことを告げずに調理してラマに食べさせた。馬と犬も食べたが、自分は食べなかった。翌朝、ラマと馬、そして犬が悟りを得て天に昇って行くのを目にした調理人は、自分だけが残されることを嘆き、大根料理の残りを捨てた地面に這いつくばって少しでも残りを食べようとしたが、口に入ったのはわずかだった。それを見たラマは、「いずれまた会うことがあるだろう」と告げて天に昇っていった。つまり、ツォルン・ゴンパはラマ・ロサン・テンペイ・ドゥンメが遷化した寺である。

近くには、多くの湖が点在しているが、チベット・ラツォ、サクテンバ・ラツォ、メラクバ・ラツォと呼ばれる3つの湖が連なっている場所がある。ラ・ツォ (bla mtsho) とは、「魂の湖」という意味で、チベット人、サクテンの人びと、メラの人びとを守護する聖なる湖とされる。いずれも樹木さへほとんどない標高4200mを超える山中にあり、澄んだ水をたたえる神秘的な湖である。

サクテンからもメラからも二日はかかる山中に位置しているため、聖地でありながらツォルン・ゴンパや湖を巡礼する人は稀である。巡礼の途中で、雨や雪が降っても避難する放牧小屋もなく、大変危険である。筆者は、テントを持参したが、途中で一日雨の中を歩いたせいで、あやうく低体

温症になるところだった^{注14)}。同行したメラの人びとによれば、サクテンの人たちとも相談して、要所に宿泊できる放牧小屋を建て、年に日を定めて巡礼できるようにする話が進行中だという。そうなれば、インド、ブータン双方からの巡礼が可能になるだろう。

4. 縮小するダンリン・ツォー自然現象か天罰か

ブータン、タシガン県カリン村東部の標高3499メートルの山中にあるダンリン・ツォ (Dangling Tsho) は、周辺の村々やサクテン、メラなどの牧畜民にとって神聖な湖とされる。ダンリンについては、アマ・ジョモと共にチベットからやってきた5人の大臣の一人、アマ・ジョモの兄弟など諸説ある。地元の人びとからはメメ・ダンリンと親しみを込めて呼ばれている。メメとはツァンラ語で「おじいさん」のことである。「あるカリンの村人が、この湖を訪れるたびに自分の所有するヒツジへの加護を祈った。そのお蔭で毎年彼のヒツジは4〜5頭ずつ増え続けた。ある時その村人が夢でダンリンを見たが、その姿が老人だったためメメ・ダンリンと呼ぶようになった」^{注15)}という。それからダンリン・ツォは家畜、そして農作物の豊作をもたらす聖地として周辺の人びとに信仰されてきた。

冬季には水が減ることから、カリンにはダンリン・ツォは冬には暖かい南部に移動するという言い伝えがあるという。しかし、筆者が訪れた2016年5月下旬、水は涸れてほんの少ししかなく、湖というよりは涸れた沼のようであった(写真7)。子どもの時に放牧のためにここへ来たことがあるという20代のメラの青年は、かつては周囲の林のあたりまで水があったのにと驚いていた。豊かな水があったこの湖は、夏でも水量が減って年々その規模が縮小しているとのことである。

2015年8月14日付クエンセル紙によれば、筆者が見たように水量が減り、岩や水底が露出するようになったのは2011年ごろからであるようだ。記事の中でカリンのガツプ(村長)は、水が減った理由を旅行者やヤク飼いが湖の近くでキャンプすることが原因だと語っている。この場所が、メラ、サクテン、ヨンプ・ラ、そしてカリンの4つの村が交差する場所にあり、メラやサクテンの牧

畜民が冬に動物をカリンに降ろし、再び戻るときに湖の近くに露営するからだという。しかし、家畜を放牧する場所と湖とは離れており、それが原因とは考えにくい。同じ紙面で森林局の役人がその原因は判明していないが、水源の問題か気候変動が関連しているのではないかと語っている。

ダンリンは、アマ・ジョモ同様、豚肉、鶏卵、玉ネギ、ニンニクを忌み嫌うとのことで、メラを出発する前に厳重に注意された。筆者も日本から持参したインスタント食品のラベルを念入りにチェックして、あやしいものはすべて持ち込まないように心がけた。キャンプ地への持ち込みやゴミの放置もご法度である。しかし、湖の近くでスナック菓子の包装袋などのゴミが捨ててあるのを見て、必ずしもすべての訪問者が守っているわけではないことを知った。同上のクエンセル紙には、1990年代に麓の高校生のグループが湖の近くにピクニックに出かけたところ、急にひどい悪天候になり、帰り路を失い、タシガンの町やヨンプ・ラにばらばらにたどり着いたという。後に彼らが湖の近くで禁じられている肉を料理しメメ・ダンリンを激怒させたことがわかったという。この話は、地元の人びとの間にも知れ渡っているが、それでも一部の不心得者がタブーとなっている食材を使った即席麺などを持ち込み、湖の近くで調理し、さらにそのゴミを放置するようになっているという。

水量が増えて元の湖に戻るのか、このまま枯れてしまうのか、ダンリンの加護の元で生活してきた人びとにとっては深刻な問題である。

5. ダライ・ラマ6世の生誕地タウンの現在

ダライ・ラマ6世ツァンヤン・ギャムツォ (tshangs dbyangs rgya mtsho) (1683 - 1706) が生まれたのは、アルナーチャル・プラデーシュのタウンである。ダライ・ラマ6世は僧侶としての生活や戒律を拒否した「遊蕩の恋愛詩人」として有名であるが、その死や没年も謎に包まれている。だが、生まれたのがタウンであることは間違いないようである。父親は、15世紀から16世紀にかけて活躍したニンマ派の埋蔵経典発掘者として有名な高僧ベマ・リンパの末弟ウギェン・サンポ (u rgyan bzang po) の子孫である。ダライ・ラマ6世が生まれた地として観光客も訪れるウギェンリン僧院

〈u rgyan gling dgon pa〉はタウンにあるが、元の建物は1714年にモンゴルのラサン・ハン (Lajang Khan) 破壊され、現在のものはダライ・ラマ7世の時代に再建されたと考えられる³⁾。同じタウンのベルカル村には、母親の実家があり、現在もその子孫が家とダライ・ラマ6世の遺品を守っている。その子孫は、母親が身ごもって出産した場所はこの実家の方だと言い伝えている。この家とツォルン・ゴンパを建てたラマ・ロサン・テンペイ・ドゥンメの生家とは目と鼻の先に位置している。

2009年にブータン東部からタウンにかけて大きな地震が起きた。その時にこのベルカルの家の石壁に大きな亀裂が入り、ウギェン・サンポやダライ・ラマ6世、そして両親などの像や貴重な遺品を納めた部屋が崩落する危険があった。筆者も当主から相談を受け、寄付者を募って小さな堂を建て、そこに像などを移すことが決まった。その後、寄付金が増え、2015年に当初の計画以上の立派な堂が完成した (写真8)。まるでその完成を待っていたかのように、2015年夏に亀裂のあった部分が崩壊したが幸いなことに内部の像などはすべて新堂に移された後のことであった。

現在、ダライ・ラマ14世による落慶法要を待つばかりとなっているが、そのダライ・ラマ法王がチベットからの亡命の際に最初にインドの地を踏んだのもタウンであった。タウンは二人のダライ・ラマゆかりの聖地であるともいえる。タウン僧院をはじめとする多くの仏教寺院が残り、タウンはアルナーチャル・プラデーシュ州の観光にとっても欠かせない存在となっている。かつてトライバル地帯と呼ばれていた州には他に歴史的建造物といえるほどのものがほとんど残されていないからである。

州内では、「温厚な仏教徒モンパが住む地」と思われてきたタウンであるが、2016年5月2日に巨大水力発電所建設計画に反対するデモ隊に対し、警察が銃を発砲し、僧侶を含む二人が亡くなるという事件が起きた。建設反対の理由は、従来の発電所が汚職によりまったく機能していないこと、あらたな建設による環境破壊や州外からの大量の労働者の流入である。劣悪な電力供給、道路建設や携帯電話のネットワークなどのインフラ整備の遅れなどに対する住民のいらだちがダム建設

反対運動に拍車をかけていた。州内の各地でダム建設に対する反対運動が起きていて、タウンで起きた発砲事件は、他県にも大きな衝撃を与えた。

ダライ・ラマ6世が残した有名な詩がある⁴⁾。

ああ白鳥よ心あらば
我に翼を貸せよかし
遠くに飛ぶにあらずして
理塘を巡り帰り来ん

この白鳥はチベット語では鶴 (khrung khrung dkar mo) と書かれているが、タウン県北西部のルンボ付近にオグロツルの越冬地があり、反対派は、ダム建設をオグロツルに対する脅威とみなし、それをダライ・ラマ6世ゆかりの重要な仏教文化の喪失につながると主張してきた^{注16)}。流血事件の後、タウン僧院の僧院長がこの事件の関連で辞任するなど、タウンは不安定な状態が続いている。

中国政府はアルナーチャル・プラデーシュと中国との国境マクマホン・ラインを認めておらず、アルナーチャル・プラデーシュの大半の地域の領有を主張している。係争中の国境に近いタウンの政情不安は、インド政府にとっても静観できるものではない。しばらくは、この国境地帯から目が離せない状態が続くであろう。

本稿は、2016年6月25日の第37回雲南懇話会での発表内容をまとめたものです。機会を与えていただいた前田栄三氏および主催者の皆さまにお礼申し上げます。

注

- 1) 固有名詞については、チベット文字で表記した場合には拡張ワイリー方式を用いて〈 〉内に記した。それ以外は、インド、ブータン内での一般的な英語表記に従って()内に記した。チベット文字をカタカナで忠実に表記することは、今のところ不可能である。本稿では、綴りを重視して、表記したもの、実際の話者の発音を重視したもの、一般的な表記に従ったものなどが混在し、揺れが生じている。ゾンカ語、プロクパ語、チベット語による違い、話者による違いなどもあり、それを個別に説明することは紙幅の制限もあり省

略した。チベット語のカタカナ表記については、今枝由郎氏がデエの『チベット史』を翻訳した際の付録の表記を参考にした⁶⁾。

- 2) 本稿は、「南アジアの山岳信仰」というテーマをかかげた講演会での発表内容をまとめたもので、5つの聖地に関する詳細な記述ではなく、あるていどの概略をまとめたものとなっている。
- 3) この歌舞劇のストーリーは、フランス語で書かれた Bacot の著書の英語版が1924年に出版されている⁷⁾。また、三宅伸一郎氏によって日本語にも訳されている。その解説によれば、この物語は典拠不明の作品だが、一説によるとモン地方のゲルク派のある高僧が地元につながる民話をもとに創作したものとされる⁸⁾。英語でこのストーリーを紹介した Chakravarti は、地名、人名などの綴りに違いはあるがほぼ同じ内容を伝えている。彼もドワ・サンモの聖地をドムコ、カラワンボ王の国をタウンとしている⁹⁾。
- 4) モンパとは、チベット南部のモン (lho mon) の住民という意味だが、独立後のインドでは憲法で定められた指定トライブ (Scheduled Tribe) の名称となっている。モンパの居住地は長い間チベットの支配下にあり、独立後のインドの行政下に置かれてからまだほんの半世紀あまりである。指定トライブとして一つの民族名を与えられているが、その内部には様々な集団を内包している。言語は大きく分けるとタウン県のモンパのモンパ語、西カメン県のモンパのツァンラ語という系統の異なる二つの言語であるが、これ以外にもダクバ語、パンチェンバ語、プロクバ語など合計11もの言語が存在する。11の言語については、モンパ言語の研究者 T. Bodt 氏の個人的な教示によっている。モンパには英語、ヒンディー語を含め、母語以外に2つ以上の言語を話せる人が多い。なお、アルナーチャル・プラデーシュの西シアン県、上シアン県に指定トライブのメンバ (Memba) が居住している。彼らは、チベット自治区の門巴族との関係が深い。メンバも門巴族も発音が異なるだけでモンパ同様、「モンの住人」という意味の名称である。アルナーチャル・プラデーシュ

内ではそれぞれの自称に従ってモンパ、メンパと分けられ、両者の言語は複雑に入り組んでいる。ブータンの人びともかつてはチベット人からモンパと呼ばれていたが、現在、唯一モンパと他称されるのは、トンサ県とワンデュ・ボダン県にまたがるブラック・マウンテン周辺に住むモンパ（Monpa）だけである。しばしば「ブータンの先住民」とされるが、インドのモンパとの直接の関係は見られない。本稿では個々の集団について触れないが、インドのモンパについては、[脇田 2009]¹⁰⁾、[脇田 2015]¹¹⁾ を参照されたい。

- 5) メラ (me rag) は、メラクと表記されるもあるが、最後のクは必ずしも発音されない。ヒマラヤ地域の言語学者である van Driem もメラ (Mera) と表記しているので、本稿ではメラとしている⁵⁾。
- 6) (mkha'gro'gro ba bzang mo)、ダーキニーはサンスクリット、カンドはカンドーマ (mkha'gro ma) のことでチベット語とともに空行母のこと。
- 7) 固有名詞については、アルナーチャル・プラデーシュ政府の7年生用ボーティ語 (チベット語) 教科書の「カラワンボ王」¹²⁾ に拠った。
- 8) The Legend of Yue Pemachen. 2014 年 3 月 14 日 BBS オンライン・ニュースより。http://www.bbs.bt/news/?p=38059 (2016 年 6 月 21 日閲覧)
- 9) メラ、サクテンのツーリズム導入に関しては [脇田 2010]¹³⁾ で論じた。
- 10) サクテン、メラの人びとはその主たる生業が牧畜であることから牧畜民という意味のジヨッパ (brog pa) あるいはブロクパ (Brokpa) と呼ばれている。ジヨッパには蔑意が込められているとして好まず、ブロクパあるいは居住地にパ (pa) を付けるのが一般的な自称である。同じような民族衣装を着用しているので、タシガン県やタシヤンツェ県のダクパ (Dakpa) やインドのモンパと混同されるが、それぞれブロクパ語、ダクパ語と言語は異なっている。東ブータンの人たちは、タワン県のモンパをダクパと包括的に呼ぶが、脚注 4 にも書いたように、モンパの言語は地域により異なり、タワン県の中心地であるタワン

の人びとは、県西部のルムラ周辺のモンパをダクパと呼んでいる。さらに西カメン県のルブラン (Lubrang) やニユクマドゥン (Nyukmadung)、タワン県のマゴウ (Mago) にもブロクパ語を話す牧畜民が住んでいるが、現在は、すべて指定トライブのモンパとなっている。

- 11) アマ・ジョモの伝説は、口承、あるいは数種類のチベット語の伝記ナムタル (nram thar) の他に Sonam Wangmo¹⁴⁾ や Chand¹⁵⁾、第4代国王王妃 Ashi Dorji Wangmo Wangchuck¹⁶⁾ の英語の著作の中で紹介されている。
- 12) 2013 年 9 月 13 日付クエンセル紙による。2015 年 2 月 25 日付の BBS オンライン・ニュースによれば、2013 年から 2014 年にかけて、タシガン県ではさらに 93 件、モンガル県では 97 件増加しているという。
- 13) 2009 年 8 月 2 日付クエンセル紙。
- 14) 筆者は 2016 年 5 月に訪れたが、ツォルン・ゴンパに到着する前日は雨、到着した晩には雪に降られた。メラの人びとは、外国人でこの地域に行ったのは筆者が初めてだというのが確証はない。
- 15) メラの Lam Rinchen から聞いた話である。
- 16) Tawang hydel projects threaten rare crane. 2015 年 8 月 27 日 The Times of India のオンライン・ニュースより。http://timesofindia.indiatimes.com/home/environment/Tawang-hydel-projects-threaten-rare-crane/articleshow/48690695.cms (2016 年 5 月 3 日閲覧)

《引用・参考文献》

- 1) Dhar, Bibhash Belief Pattern of the Pangchenpa of Arunachal Himalayas: A Mixture of Bon and Buddhism. In Indigenous Faith and Practices of the Tribes of Arunachal Pradesh. Behera M.C. & S.K. Chaudhuri (eds.), pp. 76-80. Itanagar: Himalayan Publishes, Itanagar, 2004: 79.
- 2) Aris, Michael, Hidden Treasures and Secret Lives: A Study of Pemalingpa (1450-1521) and the Sixth Dalai Lama (1683-1706). Kagan Paul International, London and New York, 1989:113.
- 3) 同上: 121
- 4) グライ・ラマ 6 世ツァンヤン・ギャムツォ:『ダ

- ライ・ラマ6世 恋愛彷徨詩集』, 今枝由郎 (訳) トランスビュー, 東京, 2007: 71.
- 5) van Driem, George: Language of the Himalayas. An Ethnolinguistic Handbook of the Greater Himalayan Region. Volume 1-3. Brill. Leiden, Boston, Köln. 2001: 867.
- 6) デエ、ロラン:『チベット史』 今枝由郎 (訳), 春秋社, 東京, 2005: 付録 66-79.
- 7) Bacot, Jacques, Three Tibetan Mysteries: Tchimekundan, Nansal, Djroazanmo: As performed in the Tibetan Monasteries. Translated by H. I. Woolf, George Routledge & Sons Ltd: London, 1924:117-197.
- 8) 三宅伸一郎・石山奈津子 (訳):『天翔ける祈りの舞ーチベット歌舞劇アチェ・ラモ三話』 臨川書店, 京都, 2008:277.
- 9) Chakravarti, B. A Cultural History of Bhutan Vol.1. Kolkata: Sagnik Books, 2003:5-9.
- 10) 脇田道子: 表象としての民族衣装ーインド、アルナーチャル・プラデーシュのモンパの事例から. 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 68: 35-58, 2009.
- 11) 脇田道子: 「民族衣装を読むーインド、アルナーチャル・プラデーシュのモンパの事例から」 鈴木正崇 (編)『森羅万象のささやきー民俗宗教研究の諸相』 pp.15-37, 風響社, 東京, 2015
- 12) Department of Karmik and Adhyamik(Chgos-Rig) Affairs, Government of Arunachal Pradesh(ed.) Bhoti Language Text Book for Class VII , 2011: 10-11.
- 13) 脇田道子: ブータン東部におけるツーリズム導入に関する一考察ーメラとサクテンの事例から. 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 70: 31-53, 2010.
- 14) Sonam, Wangmo: The Brokpas: A Semi-nomadic People in Eastern Bhutan. In Himalayan Environment and Culture. Rustomji, N.K. and Charles Ramble (eds.), pp.141-158. Indian Institute of Advanced Study Shimla / Indus Publishing Company, New Delhi. 1990: 141-144.
- 15) Chand, Raghubir: Brokpas. The Hidden Highlanders of Bhutan. PAHAR. Nainitar, India, 2004: 36-38.
- 16) Dorji Wangmo Wangchuck: A portrait of Bhutan. Treasures of the Thunder Dragon. Penguin Books, New Delhi. 2006: 165-166.

Summary

Pilgrimage to Sacred Places along the India-Bhutan Border — A Case Study from Arunachal Pradesh and Merak —

Michiko Wakita

Japan Institute for Bhutan Studies

There are various sacred places where the local people have been worshiping in Tawang District and West Kameng District of Arunachal Pradesh in India as well as the mountain area of Trashigang District in eastern Bhutan. Both areas used to be called Mon or Monyul by the people of central Tibet and were considered marginalized remote areas.

I have been visiting these sacred places since 1999. There are clear indications that the connection between these sacred places and the people has changed with the influence of the geopolitical situation and the modernization process.

In this paper I introduce the traditions inherited by the local people and describe the present situation under the following five topics:

1. The birthplace of Tibetan Opera — Ḍākinī Drowa Zangmo
2. The abode of Goddess Ama Jomo — under rapid transition
3. Tsholung Gonpa — ruins of the temple and mysterious lakes along the border
4. Shrinking lake — Dangling Tsho — a natural phenomenon or the wrath of heaven?
5. Present situation in the birthplace of the Sixth Dalai Lama